

英訳『小倉百人一首』の楽しみ方(4)

米 塚 真 治

承前。

It is early dawn,
And across Uji River
Dimly through the fog
The fish weirs are unspeaking
Robed ghosts who ford the shallows.

六十四番「朝ぼらけ 宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木」(権中納言定頼)の訳。

前稿で小式部に一矢報いられた、問題の権中納言の元歌にいう「川霧絶え絶え」とは、川面に接するほどに低く垂れ込めた霧がしだいに小さな塊へと分解し、そこそこで網代木に引っかかりながら——屏風絵にみる雲のように——緩やかにたなびいてゆく、そのような気象条件の謂いである。

夜明け、灰色をへて白一面となる川霧は気温の上昇とともに微かな気流に誘われて、そこに杭が一本(組)、また一本(組)と姿を現す。魚を捕獲するためのこの杭は「瀬々」つまりあちこちの浅瀬に設けられていて、漸く明らかになるその点在は、空間の広がりや歌人にハッと意識させる。

他方、英訳においては訳者解説に「intermittently(間歇的に、不規則な間をおいて)見える幽霊たちの正体」云々とあるように、川霧の「たえだえ」は空間的であるよりむしろ時間的な要素として把握されているようだ。weirは元歌のように足下の霧よりも丈高くあるいは霧の切れ間から瞭然と、突き出しているのではなくて、あくまで霧の薄まった箇所全体が「ぼんやりと」透視されるだけである。

元来「わたる」とは例えば「晴れ渡る」と同じ用法であって、元歌は霧がしだいに引き払ってゆく情景を描いているのだが、訳詩にそんな牙え牙えした感興はみられない。訳詩の「あらはれわたる」は文字通り「現れ～渡る」と解されているごとくで、weirは霧の中に「出現」し「渡御 ford」する者たちの姿に喩えられるのだ。——なるほど「たえだえ」で、霧がときどき薄くなったり濃くなったり等というのは一聴妙なはなしである。これは気流で霧が流れているからなのだが、そこで視点を変えて、「時々」しかあらは(わ)れないのは霧がわの事情ではなく、実は透視される物体の方が霧の濃淡の中を移動しているから、とみても(poeticな)辻褄は合うわけである。

この者どもは川を「横切って」acrossいるというから、weirsの配置は網代木と異なって、差し渡しに線上に列になっているのだろう。元歌と比べれば、意識させるのはおなじ空間でも、こちらは二次元の広がりよりも一次元的な距離感であるという点、違いがある。

それにしても、なぜ幽霊の隊列なのか。彼らの由縁と目的はどこにあるのか。

網が巻き付いて「ぼんやり」と霞む杭ならば——しかし、そうなのだろうか？（後述）——人型への連想はたやすく理解できる。しかし訳者の念頭にあるのは、形態上の連想だけではないようだ⁽¹⁾。

解説に曰く、「宇治（『家の衛兵』の意）という地名を見れば、時おり姿を見せるこの幽霊たちの正体が何であるか、推測もつこうというものだ」。訳者は例のごとくほとんどモダニスト的な逐字解釈を地名に適用して、「宇」（堂宇，八紘一字の宇。屋根，すなわち家の換喩）の安寧を守る兵というイメージを手に入れているのだ。

「隊列」は家の周りに規則正しく並んだ彼らの配置とも響き合うだろうし、ごく「象徴的」に——職務内容を離れ——言えば「網」もまた不審者を捕獲するに役立つかもしれない（繰り返すが、本当に網なのだろうか？ともかく、）死してなお自らの仕える氏（うぢ！⁽²⁾）の宇治なる別邸なり、離宮なりを守ろうとしている、そんな衛兵たちの幽霊を、歌人は幻視したというのだ。

見逃せないのは元歌と英訳との間で、時間・空間のちがいに増して、想定された視点の位置がちがうことだ。

元の歌で詠み手の視点は、川霧を岸の上から俯瞰している。詳しく言えばこうだ、詠み手はたしかに川岸に立つとしても、一首の徐々に広がりゆく情景を構成すべき視点は最終的に、日本の絵画とおなじく、特定不可能な場所にまで引き、消失する⁽³⁾と考えるべきだ。

対して英訳者の見立てには、線遠近法図像におけるごとく明確な「視点」が存在する。前述したように「わたる」が水平の距離感として知覚される理由でもあるが、訳詩にとって決定的に、ヨリ重要なのはこの視点の「実在」が生み出す臨場感である。訳詩の視点「人物」はいま、目と鼻の先を霧に囲まれ、情景に半ば巻き込まれたものとしてある。そうであってはじめて幽霊たちは視点人物にとってリアルなものとして立ち現れるし、「物言わぬ」彼ら——これは訳者が付加した語——の残留思念は（視点人物を通じて）読者へと確実に送り届けられる。

そして元歌の霧が微風と陽の光のまにに切れ切れに散ってゆき、朝のおとずれを告げるのとは異なり、英訳における霧は「時折薄くなる」にすぎない。霧は詠み手からけっして去ることはないかのようであり、夜と昼のあわいに姿を見せる幽霊たちもまた同じく、読者の意識の闕にその姿を刻みこんで、いっかな離れようとしない。

権中納言による原作も鑑賞しがいがあるが、英訳はひとつの創作詩——彼らアメリカ人なら誰でも知っている『ハックルベリー・フィンの冒険』の、有名なミシシッピ川の夜明けの描写にも連なるような——として評価でき、読み解くのに楽しみの多い詩となっている。だがおもしろいのはこの解釈がまったくの鬼子というわけでもなく、傍流となった古註を復活させたともいえることだ。⁽⁴⁾

実は、この英訳には翻訳におけるオリエンタリズムの興味深い一例がある。「網代木」と weir をめぐってだが——英語で言う weir とは「木製のフェンスで、流れをせき止めてプールを作り魚を捕るためのもの」⁽⁵⁾である。しかしこの詩では（robe が網の比喩であるならば）weir は網をまとっていることになる。

どうやらこういうことらしい、英訳者は「網代木」が翻訳不可能と考え weir を訳語に選んだ。そうしながら彼は、それが網を使用した日本仕様である旨断っているのだ。

しかしながら実際の「網代木」とは網をよらす木ではなく網代わりの木の意でそこに網はなく、つまりは weir にこそ近いものなのである。

いっぽうで網代木は浅瀬につくる小規模なやなで、ここでは川中に点在するはずだ。ところが英

訳でそれが隊列と呼ばれるのは、あたかも鴨川を仕切るかのような大規模な——weir 状の——constructionのように想像されているからである。以上まとめれば、せっかくの配慮は外れてしまい、自分自身には反省が及びがたい、というわけだ。(どこかの国のように)

オリエンタリズム関連の訳例、時局もありもうひとつ、こんどは母式部の歌を。

In the thought that soon
Outside this world I shall be
Where there is nothing,
If only I could see you
And speak with you once again!

五十六番「あらざらむこの世のほかの思ひ出にいまひとたびの逢ふこともがな」(和泉式部)の訳。

来世に携える思い出として彼と今一度の逢瀬の記憶が欲しい、と訴える歌人。没後この「思い出」を愛で続けるのだろうかから、要は「死んでも来世で貴男を思い続ける」とのべている。

対して英訳はin the thought that「…と私は考える」と提起される。名詞節の内容は一、自分はこの世からいなくなる。二、この世の外には何もない。そういう思いがひたひたと迫ってきて、だから、まだ何かできる今のうちに「会い」たい、というわけだ。「死んだらお終いよ」を前提とする現世的な解釈である。

「思ひ出に」が「思い出として」ではなくて、「…を想起しつつ」になっているのは誤訳である。誤訳を誘発したのは、思い出を持っていく場所であるところの「来世(の生活)」が英訳者にとっては存在しないからである。「何もない場所」と書いているのも誤訳の範疇で——じつは「解釈」の範疇であるのかもしれない(後述)——文法的に言えば、元歌「あらざらむ」の主語を取り違えているのだ。

こうして「死後の世界」観の違い、「逢/会う理由」の違い⁽⁶⁾が生まれるが、この原因はどこにあるだろうか。Nirvanaを参照する四十三番の如く訳者の心には、和歌における死後の世界は西洋とは逆に無であるに違いない、無でなければならぬという先入主があったようで、それで、「あらず」の明記されない主語を補わず、「何もない」と解したもののようである。これもまたオリエンタリズムの問題といってしまうえば、事は済む(ように見える)。

しかし元歌の従前の解釈にいう、「私がいなくなるこの世の外」と書いて「来世」と読ますやり方に、そもそも不自然さは感じられないだろうか。

「私がいなくなるあの世」。この一句の奇妙さを指摘する註は過去にもある。けだし没後彼女は来世へゆく、つまりその世に行き住むわけである。そこに彼女が「いない」とは胡乱である。「いなく」なるのは「この世」からでなければならない。

こう考えられないか? つまり、ここにはたくらみがあり、「執念深い」この歌人の関心は、実は、「…なった、この世の外」よりむしろ前半の「私がいなくなったこの世」にある。

自分の死後この世では、恋人が自分以外の他の女と親しくするであろう。このさい、「思い出」とは自身にとっての思い出ではなく、じつは彼女にとっての思い出を指す。「思い出として、アタシの体を覚えていて!」 いずれ他の女と寝るだろう彼の身体に、己の肉体の消えない感触を刻みつけること、そのために彼女は「逢う」のだと。現状を受容しながら迸る情念、これは過去の女性歌人の

特徴ではある。

この表裏の仮説は英訳者の誤訳を「理解」する過程でわき上がってきた。訳詩自体は以前扱った数種ほど「優れた誤訳」ではないが、しかし元歌の意味を照らし返し、気付かずにいた可能性を浮かび上がらすという意味では、十分貢献している。

そのような「貢献」の例を、ささやかだが以下に数首続けてみよう。

We may soak our sleeves
With tears for one another;
Yet our promise holds
Till Pine Mountain in Sue
Shall be erased by the waves.

四十二番「契りきな かたみに袖をしぼりつつ 末の松山波越さじとは」(清原元輔)の訳。倒置を元の順番に戻し、地の文と引用との区別を明示すれば、本文は「かたみに袖をしぼりつつ『末の松山波越さじ』とは契りきな」のごとくである。文末に見える助動詞「き」と助詞「な」とは、愛を語られ愛を誓い合ったその「過去」とは異なってしまった現在のありよう「別離」と、この事実に対する詠み手の「詠嘆」とを指示している。

代作なので正確に言えば慨嘆するのは「詠み手」ではなく、依頼者なのだが、そのような「商品」としての一首の肝は「涙」にある。涙は過去に恋人が共に流した涙であると同時に、歌を送りつけられる元・恋人の女性にとっては、フラれた依頼男性が独り流しているだろう涙も連想させるのだ。依頼男性の頭を占めるのはとうぜん後者、悔し涙の方で、だから歌も「約束したろう」「裏切ったのかよ」と始まるのだが、抗議にあまり拘らず前者、感情を共有しえた時間の記憶へとソフトしてやるのが玄人の技術というものだ。アンダーステイトメントによって、女性のなかに眠る感情のおきに再び点火しようという目論見だ。

こうして元歌は別離の後で相手との誓いを回想する(回想をうながす)が、これに対して英訳で別離はまだおとずれていない。自分たちは互いに袖を涙で濡らす「かもしれない」が、しかし「約束」した以上、どのような「荒波」に遭おうと約束が破棄されることはありえない(破るなヨ)——これが英訳の本文である。

英訳で「涙」は過去の現実ではなく、将来の想像上の涙であるが、涙そのものもまた異なる。原文に「かたみに袖を」とあるにしても、涙するのが「将来」である英訳の恋人たちは、その危機にあって最早一緒にはいない。したがって元歌のごとくひしと抱き合い、相手の袖を自分の涙で濡らしかつはその(相手の)袖を絞る状況は、想定しようがない。

この「かたみ」の問題に英訳者は、「かたみに」と「袖を絞る」の間に線を引くことで解決を図ろうとする。すなわち二人は別々に自分自身の衣の袖を絞るにすぎないけれども、しかしその涙はお互いの「ため」、つまり遠く離れた相手の身の上や心根を思いやっつてのものだ、そのように解するのである。

さて、こうして初めから終わりまで二人を「結びつける」要素に貫かれた訳詩の本文には、元歌にあるような「脅し」の要素はみられない(「契約の再確認」はあっても)。これは、ひとつには危機が未だ現前していないという理由もあるが、ヨリ本質的には英訳と元歌との address の方向の違いをみななければならない。すなわち英訳の呼びかけは相手を越えているのだ。

変心した恋人との、あくまで個人的な関係を扱う元歌とは異なり、英訳の主題は、個人が個人と

の関係に抛って立つことで、彼らの前に障害として立ち現れる世間／社会に挑まんとする。そのため彼女＝同志と励ましあう——これを換言すれば、近代文学＝小説的・主題となっているのである。

訳者がこの着想を得たゆえんを辿るのは難しくない。あたかも近代詩に対するごとく、あたうる限りディテールのすべてを有心として読みとろうとするのが訳者の方法だが、彼はここでも「波」の一語から「世間の荒波」のごとき主題を読みとり、これに整合する枠組みを作ってみせたのであろう。

これをどう評価しようか？ 解説で訳者は記している、「我が国の古典学者達によれば、東洋の詩人達は決して感情を暴発させることがないという。この一首はしかし、この撰集にあって、その意見に首を振らせる歌の一つである。」このように Galt 氏は、「常識的東洋観」を覆す感情に思いを致してはいた。しかしながら危機も、明示的な理由もないうちから高揚し、感涙にむせぶ元歌の恋人達は、いってみれば過激に古代的であって、彼の想像をさらに超えるものであったのだ。

「裏切られた恋人の抗議」という一首の成立事情そのものは、西洋人にも現代日本人にも余りにわかりやすく見える。しかし、そこで参照されている恋愛の時間の記憶、互いに誰の涙とも袖ともつかぬ忘我、自他の溶融した合一などは、言われてみれば西洋人にとって——また現代日本人にとって——とうてい自明なものではなかったというわけだ。

とはいえ、英訳のみせる、離れた場所からの同時的 empathy (これぞ telepathy!) もなかなか魅力的に過激ではないだろうか？

She might even say
—Yes, of me— “What a pity!”
Yet deep in her heart
Would she be considering
That I waste away for her?

四十五番「あはれともいふべき人は思ほえて身のいたづらになりぬべきかな」(謙徳公)の訳。

恋の苦難に哀れみをかけてくれる人は誰も心当たりがなく、このままでは骨折り損に終わるだけだろうというのが元歌。

いっぽう訳者は詩に付けた解説で『人』は当時、通常は『彼女』を意味したと、これが一般の人をさすことを否定したうえで、彼女は確かに哀れみをかけてくれるだろう、がしかし「自分が彼女のためにやつれていることには思いをいたすであろうか」と通訳する。三句切れを二句切れに変え、その上で下句は、三句と四・五句の連とを倒置させ、思ほゆの主語を歌人ではなく女性ととり、ときわめて自由に訳されている——とは要するに誤訳で、他の歌で「人」が女性を指すことに、訳者は余程強い印象を受けたのであろうか。

しかしただ誤訳と切り捨てるに惜しいのは、元歌の状況設定についていま一度議論を促すからだ。訳詩下句の内容は一見すると次のように見える。彼女は「言って」くれるが「わかって」いない——つまり消耗の様子は見て取るがそれがまさに彼女自身と関係しようとは思いつかない。この場合状況は、元歌の逢不逢恋という設定とは異なり、未逢恋と考えられるだろう。事情があり秘めに秘めた恋をうち明ける、ぎりぎりの歌というところだろうか。

だが英訳の真意は別にあるはずと気づかせるのは、「心の奥底で」の一語だ。けだし訳詩の「彼女」は、「お気の毒」と言ってくれるほどには、彼女自身に理由があることを認識してはいる。しか

しその発話は本心からとはなるまいというのが、訳詩の伝えることだ。この「現代的」設定において、二人は関係が続けており、女に振り回される男の独白と考えられる。責任を認めていなければ罪悪感もさらさらなくて、究極的には手前が勝手に消耗しているのだと思っている、そのような女性。ここで consider とは、どれだけ思っているかという以上に、それが自分にとってどれほどの影響があるかを理解しているか、そのような意味だ。

As yet a bit young
For a real name as lover
To be established,
I' ve begun these thoughts of you,
People indeed not knowing.

四十一番「恋すてふ我が名はまだき立ちにけり 人知れずこそ思ひそめしか」（壬生忠見）の訳。
人目を忍び恋を始めたが早くも人の噂になってしまった、その意外さに驚くのが本文。古来の諸註に異同はない——かのように見えるがそれは読み下しのレベルに過ぎなくて、「しか」の詠嘆が何を指すものであるか、この点は、かならずしも自明ではない。それはたんに、少し誇らかな気分を謙遜する、含羞と当惑のポーズであって、そこに「文学」性やら廷臣達のホモソーシャルな共同性といったものを読みとるべきなのか。あるいは文字通り慨嘆すなわち失望を表していて、とすれば歌人の心中にはかわりに実現のほどを期待していた事柄が、何かあったのでもあろうか。

「人知れず始めた」恋が、始まって、つまり既に「逢ひ」などしているならば、それは前者すなわち世間の人々に知られた当惑を指すのであろう。しかし「人知れず」とある人が、若し相手の女性をふくんでいるならば、一首はにわかに関係性を詠んだ歌として立ち現れる。ことの次第もまったく異なってくる。さらに相違は、父親との関係性にも及んでくるのだ。

さてこれらの諸点は、いかにも奇妙なことではあるが、英訳者が提供するプリミティブな誤訳の例を検証する過程で明らかになってきたことなのである。

英訳の前半にみえる a bit とは「少しだけ」ではなく「いささか」つまり「大いに」の意であり、そこで “a bit young/For a real name as lover/To be established” とは「若くして立った」ではなく、“a bit too young…to be established” つまり「若すぎるため、恋の評判は立っていない」を意味する。一、私は彼女に懸想している。二、人々はそれを知らない。三、なぜなら私が若すぎるから、というわけだ。

冒頭の as yet (ともかく現状は) ということばは、将来は違うだろうという期待を反語的に措定している。素質は十分。——ならばその「素質」とは何であるかと問うに、英訳は real name as lover すなわち「色男としての本格的な名声」を establish 「巷間に確立する」という訳を与えつつ、恋歌作者として名高い父・壬生忠岑を参照点として召喚しているのである。

「まさかあ」「いくらあの色男の息子とはいえ、まだガキでしょ？」と世間。「見くびるんじゃねえよ」と強がるませた少年。

コンスタティヴにはそのように見える。しかしながら見落とせないのは後半に begun these thoughts of you と書かれてあることで、訳詩は当の女性に宛てられているのだ。するとパフォーマンスの意味合いは一転する。いま「懸想」と言ったようにこれは「あなた」への告白であって、「若すぎるので信じてもらえない」かもしれないが「本気なんです、情熱を受け入れてください」

との意である。

そのとき訳の前半部には、「そんなことない」という強がりと共に、「まだ早すぎますか？」とのためらいも見て取るのが自然で、それは相手の女性が「釣り合う」ためには一定の年齢や経験や官位やを必要とする、お姉様なりお姫様なりであるような事情を暗示しているのかもしれない。

前半にそうした表裏と留保があるならば、これが恋のアピールである以上後半にも、一見する弱気とは裏腹な心情が表出されなければならないのは道理で、「人々は実は知りませんが」とある indeed の一句は「人々は知りませんが実は」にひとしく⁽⁷⁾、実はひそかな自信、それとともに「ほかの人たちがどう思おうと、僕は気にしないんです」という「一途」感をも演出している。

あまりにも明らかなことだが、英訳では、「まだき立ちにけり」の一節に誤訳が生じている。

上句に「未だき」（未だ適当な時期ではないのに）と「けり」（ああ…）、下句に「こそ」～「しか」の係り結びを配した元歌は①時期尚早にもかかわらず②知られてしまった当惑を歌うのだが、英訳は「まだき」を現代語様に誤解し、完了の「に」～「ぬ」を無視したあげく、①「まだ」年齢が若いという理由で②「まだ」知られていないと歌うのだ。

ここに至る過程に何か斟酌すべきものや、興味深いものがあるわけではなく誤訳は初歩的なものだが、ただしその結果得られたパーソナルな解釈の可能性には、考えさせるものがなしとほしない。すなわち元歌で「適当な時期」ではないという「適当な時期」とはいったい、たんに公表すべき時期の謂いなのだろうか。

一首が仮にパーソナルな歌を志向（歌合わせでの機会詩だから「趣向」）するなら、その主題は未逢恋における告白の時期となる。ヨリ正確に言うなら、情報伝達の時期尚早を慨嘆するように見せてじつは伝達の行われたルートをこそ問題にしていると考えられるのだ。

人の噂に上れば相手がナーバスになるのは当然である。騒ぎは避けたい、自分についての批評も耳に入る。「誤解よ」と言いつつ満更でもない可能性もあるけれども他方、「誤解よ」と繰り返すうちに自己暗示がかかって拒絶で固まってしまう可能性もある。ほんらい、不意打ちで自ら告白すれば、十分な条件を備えぬ自分にも、チャンスはあったのだが（誰からだって告白されると嬉しいものだし）云々。

そしてこの露見は、「評判」故の憧憬、反発、とぼちちりといった父との関係性も召喚するのである。

Suppose some boatmen
Sailing into Yura Straits
Have lost their rudder.
They will be no more at sea
Than I on the path of love.

四十六番「由良の門を渡る舟人楫を絶え行方も知らぬ恋の道かな」（曾禰好忠）の訳。

元歌は、楫つまり推進力を失い自力航行不能となって海上をあてどなく漂う、そのような舟人の姿に託して恋愛の一般論を語り、かつは歌人自身の身の上も暗示している。

他方英訳では帆船に乗り組んだ舟人達もしくはクルーが、舵を失い操船不能に陥る。そしてレファレントとしての「私」＝歌人の存在は明示されている。この歌人の所在と、舟人の所在とをタネとして訳者は元歌の比喩にかわる比較表現の妙を編み出す。

そこにみられる逆説はことに技巧的で、興味深いものだ、すなわち舟人達が海上に在るのに対し、「恋の道」にある「私」は、陸上に在ることになる。「彼ら」はとうぜん at sea であるがこの句はいっぽうで「迷う」「途方に暮れる」意であるから、その点、陸上にある「私」もまた at sea であるのだ。「彼らは決して私以上に at sea になるわけではない」換言すれば「彼らも at sea であろうが私もそれに劣らぬ位多分に at sea だ」とは、そのような意味の一捻りである。

さらに意味の密度を上げようと、訳者は解説で例のごとく、地名の逐字的読み込みを敢行している。曰く「Straits of Good Reason——歌の内容にこれ以上似つかわしい地名はまたとあるまい」。英語の strait の意味の二重性を巧みに利用し、良き理性の海峡／拘束されるボン・サンス、と重ねてみせておもしろい。

が、しかし「由良のと門」の「由」を「理性」と解するには少々の無理がある。多分に reason という定義語に寄りかかったか引きずられたかしたものであって、日本人が英単語を調べる際に英英辞典の定義によらず英和辞典の訳語から語義を推測したのと同様の、曲解、ないし誤解ではないだろうか。

そのようにひとつ唾を付けてみると、他にも魅力と正確度とがいささかバランスを失した箇所は見られるのである。

梶ならぬ舵の喪失のため制御不能ながら、「帆」を立て風力と大きな慣性モーメントによって突進を続ける訳詩の船は、この後どこに行き着くのだろうか。手がかりは into という語だ。「渡る」は直訳で across のはずだが訳者は into を充てる、それによって、「恋」という「魔の海域」へと引き入れられる作者、理性すら失わず危険な魅惑に抗し得ない心中が彷彿とするのである。行き着く先は vortex の中ではあるまいか。何ともロマンティックな解釈ではないか。

「瀬戸」にあるはずの「潮の満ち干」という自然条件を活用した、きわめて魅力的な解釈になっている。だが、もとより元歌の「舟」とは小舟であり、既にして推進力を失っているのだ。そうしてみると「行方も知らぬ」とは本来、なかなか行き着かない、つまり恋が難航しているといったほどの意味であったのだろう。

こうした経緯だが、さて私たちは、「行方も知らぬ恋の道」と言われて、近代的にロマンティックに読みはしないだろうか？ そうならば、元歌の含意がどこにあったかを逆に照らし出す意味で、英訳は価値を持っていると言える。

With whom should I here
Go bidding for acquaintance?
Even the pine trees
That have stood from ancient times
On High Sand are not friendly.

三十四番「誰をかも知る人にせむ 高砂の松も昔の友ならなくに」(藤原興風)の訳。

自身の長寿とひきかえに畏友をすべて失った老人の孤独が、元歌の主題。

ところが英訳には「この地」で「知り合いを求める」が反応は皆よそよそしい——松さえもよそよそしく感じられる、とあって、転勤転居のストレスが主題のようなのだ。心因反応とみえて人間と松とがひとしなみに並列されている理由は、どちらも「この地に古くからいる」という点であるらしく、反対に作者は新住民とみられる。

このような設定の傍証は、例によって地名に求められており、解説に曰く

「歌人は地名を最大限に活用している。『高砂（高い・砂）とよばれる町に、乾いたざらざらした（dry, gritty）人たち以外の誰がいるだろうか』と問いかけさえするのだ」

「高慢」で「うるおいがない」という地名の読み込みは、その強度にもかかわらず「誤解」なのだが、しかし——とここで私たちは気付くのだが——元歌を老人の歌と解する根拠は、そもそもどこにあったのだろうか？ 実は、元歌はその設定を伝えるに「松」のイメージに多くを寄りかかっていると考えられるのだ。そして同様に——ここがおもしろいのだが——訳詩もまた英語国民なりに、pine のイメージに正しく寄りかかっているのである。

解説するなら「松」は「松竹梅」の一位。門松。白砂青松（はくしゃせいしょう）。景勝「三保の松原」「松島」「天橋立」、かつての象潟等々。これらが日本語の松の連想「おめでたい」「長寿」を導くとすると、英語における pine の連想は第一に不毛 barren である。ほんらい生態は日本と変わらないものの、そこが海岸の砂地や岩場、たとえば米国南部大西洋岸の肥沃とはかけ離れた土壌であれば、pine がぼつぼつと生えている風景は「荒涼」以外のなにものでもないのである。これは当然、英訳者にとって、地名「高砂」の逐字的読み込みと符合して見える。

さらに pine の花言葉が pity なのであってみれば、誰からも「同情」の声がかからないとする英訳は、かなりの意味の密度・強度をもっていたことが了解される。

ここで、私たちは誘惑される。あるいは、競いたくなる。つまり、元歌の「松」のイメージにも、英訳と同じくらの意味の強度、活用の余地を見いだすことはできないものだろうか。実は気づきさえすれば話は早く、松の表皮は老人に似てかさついてひび割れている。それに、風の強い海岸の松は、風雪に耐え苦節ウン十年の「私」よろしく、「腰が曲がっている」。そうして一首に松を登場させる意味は、ただ「誰にも相手にされない」を重畳させるのではなく、それら松と「私」とが、同質性にもかかわらず断絶がある——「一緒にするなよ」と——その悲劇にあったことが推測できるのだ。この解釈は、英訳からの刺激である。

註

- (1) 講義で学生の一人——大妻女子短大英文科一年（当時）吉田由希子さん——は *robed ghosts* の生成過程について、「網代木」の「木」は *robe* を「着」るに通じ、さらに「絶え絶え」に死のイメージが見出せるからと指摘した。この英訳に関する限り、訝えているというほかない。彼女はさらに、木にまといつく霧を白い経帷子に喩えたと言及が——これはどちらかといえば、元歌の情景にこそ似合うだろう（この文で *fog* と *robe* が同じものと見るのは苦しいだろうから）。
- (2) これも吉田さん。
- (3) 平行遠近法・線遠近法と視点の問題について、高階秀爾『日本美術を見る眼』岩波書店、1991年。
- (4) たとえば江戸前期に読まれた細川幽斎の抄本が、一首に死生観を読み込んでいる。
- (5) Collins Cobuild Dictionary CD-ROM 2001
- (6) ある学生は「何もない」を比喩と解し、死後の世界は生前と同じものがすべて揃っているパラレルワールドだが、唯一あなただけがない、そのせいで自分にとっては何もないと同然なのだ論じた。ブンガク的で秀逸である。「逢／会う」については、病の重い病人がまさか事に及ぶことを口にすまいと訳者は判断したのである——これも、もとの歌と英訳とどちらがヨリ死期が迫っているのだろうかという学生の問を受けて考えてみたもの。

(7) 四十番「秘すれば花」の優柔不断男との歌合。